

氏名	鶴 見 尚 和
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	博 乙 第 2285 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 3 年 6 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）
学 位 論 文 題 目	特発性血小板減少性紫斑病（ITP）に関する臨床的研究 第 1 編 ITP の予後と血小板表面関連免疫グロブリン platelet associated IgG (PAIgG) との関係 第 2 編 ITP の治療効果の解析とステロイド難反応性 ITP に対するコルヒチン療法の意義について
論 文 審 査 委 員	教授 辻 孝夫      教授 太田善介      教授 岡田 茂

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

ITP症例を対象として、第 1 編では、一元放射状免疫拡散法により、血小板表面関連免疫グロブリン platelet associated IgG (PAIgG) を測定し、ITP の病態および治療予後との関連につき検討し、さらに、prednisolone 10 mg/day 以下では血小板数を 5 万/ $\mu$ l 以上に維持することが不可能な症例をステロイド難反応性 ITP として抽出し、PAIgG がステロイド難反応性 ITP の予後推定の指標となるか否かを検討した。第 2 編では、ステロイド難反応性 ITP の治療法として、コルヒチン療法について検討した。

ITP では PAIgG は有意に高値を示し、かつ PAIgG と血小板数の間には負の相関を認め、PAIgG が予後推定の指標となり得ることが判明した。ステロイド難反応性 ITP 16 例にコルヒチンの投与を行ない、3 例 (18.8%) に完全寛解が得られ、著効、有効の 3 例と併せて、6 例 (37.5%) に臨床的寛解が認められた。

コルヒチンは効果が一過性でなく、安価であり、ステロイド難反応性 ITP の治療に有用性があると考えられた。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、特発性血小板減少性紫斑病 (ITP) に関する一元放射状免疫拡散法を用いた Platelet associated IgG (P A IgG) 測定を中心にした臨床的研究である。その結果、ITP では P A IgG は有意に高値を示すこと、また血小板数との間には負の相関をすることなど臨床的な治療指針をたてる上で有用であることを証明している。

よって、本研究者は、医学博士の学位を得る資格があると認める。